

I 実践

1 研究主題

互いに励まし合い、よりよい集団活動を築こうとする児童活動の推進

(1) 主題設定の理由

本校は、「ふるさと大久保を愛し、豊かに生きる児童の育成」を教育目標として掲げている。「豊かに生きる児童」を育成するために人権教育において「互いに励まし合い」をテーマに、日々の児童活動を見直し進めることで、感謝し合ったり認め合ったりしながら活動できるようにしたい。そして、温かな心と好ましい人間関係を育成したいと考え、本主題を設定した。

(2) 研究内容

- ア 学校生活を楽しむためのアンケート
- イ 全校児童参加のあいさつ運動
- ウ 人権に関する啓発運動の工夫

2 実践内容

(1) 学校生活を楽しむアンケート

日々の学校生活の児童の様子を把握するため「学校生活を楽しむためのアンケート」を行った。1学期と2学期に同じアンケートを行い結果を比較することで、児童の学校生活での悩みや問題を明確にし、支援に生かせるようにした。

アンケートの結果から、友達関係で困っている児童にはすぐに支援に当たり、学校全体として指導しなければ事柄には、共通理解を図りクラスや学年の枠を超え、細かに取り組んできた。多くの目で、いろいろな角度から見つめ支援することで、子供達にも相手のことを考え、どのように行動すべきか、具体的な態度や行動ができるよう支援してきた。また、児童の真の心を求め、無記名での調査も試みた。

(2) 全校参加のあいさつ運動

ア 毎月第1週に昇降口で実施（月～金）

毎月生活委員会の活動で、あいさつ運動を行ってきた。あいさつの言葉や気持ちを表現した看板を準備し元気に実施できた。

イ 月ごとに各学年の児童が交代で全員参加（7：50～8：05）

5月（生活委員会） 6月（5学年） 9月（4学年） 10月（3学年）
11月（6学年） 1月（2学年） 2月（1学年）

南校舎と北校舎に別れ生活委員会の児童が実施してきたが、月を決め全員が参加し意識を高めようと考えた。人数が少ないとなかなか声を出せない児童も、クラスの友達と一緒にとなると、登校してくる上級生にも元気に声を掛けることができ、下級生には優しく声を掛ける姿も見られた。あいさつ運動に参加できることを楽しみ待つ学年もでてきた。

ウ スタート日は委員会の児童が実施（手本）

あいさつ運動がスムーズにできるようスタートとなる日は、生活委員会の児童が毎回お手本として行っている。次の日からの学年に気持ちよくバトンタッチできるようにした。短い時間精一杯声を掛ける児童も出てきた。

(3) 人権に関する啓発運動の工夫

ア 週的生活目標を活用した人権意識の高揚

毎週月曜日に「今週のめあて」として生活目標が各クラスに配られる。月の教育目標や児童の実態などを踏まえて、看護当番の先生方が話し合いで内容を決めている。人権にかかわる内容を学期ごとに取り上げ具体的に分かりやすく「ふわふわ言葉をたくさん使おう」「ありがとう」「ごめんね」「がんばったね」などを提示したり、児童が週目標を意識しながら1日を過ごせるよう、お昼の放送でも呼びかけてもらうなど、子供達の活動を取り入れた。

イ 全校人権メッセージへの取り組み

学年ごとにこれまでに取り上げられた参考作品に触れ、個々が感じている事柄を表現できるようクラスごとに人権メッセージに取り組んだ。

わたしは、ともだちのえがおがすきです。ともだちがわらうとわたしもたのしいきもちになるからです。わたしもともだちにたくさんえがおをあげたいです。

1年

平等とは難しいことだ。だれかが楽しむと、だれかはがまんする。でも考えて行動すれば、みんな平等に楽しめると思う。がまんしたことは、次の楽しみへつながると思う。がまんした人にはありがとうの気持ちを。そして、平等を考えて生活できるようにしたい。

6年

人権メッセージに取り組んだ後には、各学年の作品を選び1週間かけて、税かつ委員会の児童が中心になり校内放送で発表した。1学年から順に学年が上がるごとに発表内容が深まり、放送時には耳を澄ます教室がほとんどであった。自分が書いたメッセージが下級生にも上級生にも聞かれたことで、高学年は「下級生のお手本となるように、自分も進んでメッセージの内容を守っていこう。」という意識をもつこともできた。

II 成果と課題

あいさつ運動も人権メッセージも全校児童が係わることにより、学校生活の中で、友達に丁寧な言葉で話しかけたり、苦手なところを手伝おうかと声をかけたりする児童の姿を見る機会がふえた。人権教育の取り組みが児童の実戦行動につながってきていると思う。児童の生活アンケートの結果からも、「縦割り班活動などで低学年と遊んだり、集会活動でいっしょに活動したりするのが楽しい」という声も聞かれた。学年を越え望ましい人間関係が広がりつつあることの表れだと考えられる。

集団活動を通して、相手のよさを認め友達と仲良くしていくことができるようになってきた一方で、「今の発言はおかしい」とか「今の行動は相手に失礼だ」という気付きを進んで声に出せる児童は多くはない。互いのよさを認め励まし合う意識が育ちつつある一方で、身の回りに起きた問題を自分たち解決していこうとする児童はまだ限られている。

よりよい集団活動を進めるとともに、人権が大切にされていない状況をおかしい、許せないとするような雰囲気醸成し、問題を主体的に解決していこうとする実践的態度を育てていくことがこの先の課題である。